

順逆無別の理ぞ

來れ人々法華經に

吾は佛に護られて

行きてそれらを救ふべし

七字の光明いやまさる

理智の母

太田 赤 童

美と榮光にこきめく自然に

爛熳と花が咲いた

小鳥が來て甘い美しい夢を見た

人々は喜びに満ちて躍つて居るうちに

かすかな音をたて、

地上に花は散つた

小鳥は歌舞の酔から醒めたのに

人々は笑ひ續けた

藝術家は獨り泣いた。

生育と躍動にひらめく自然に

爛々たる灼熱に生あるものゝ凡てが

力一ぱいに生きてゐる

草も木も水も山も蟲も鳥も

人々は宵の色彩と燈火に親んだ

蒼穹に輝く星と月との神秘を

人々はだまつて見てゐた

哲學者は獨り考へた。

透徹と靜寂にしづみゆく自然に

玲瓏の感じ深まりゆくとき

凋落と孤獨が地上に來た、

人々は落膽と失望とに

軽い溜め息をついた

苦痛の叫びも絶えて凡てが死に歸つた、

宗教家はだまつて見てゐた。

荒莫と廢殘にさすらう自然に

萬有はしづかに眠つてゐる

創造と試みにつかれたやうに

——煩悶——乾燥——

人々は自滅の投影をみつめて

暗黒と恐怖とを呪ふた

道學者は知らん顔をしてゐた。(一一、九、二六)

哺乳類のいろいろ

平地光瀨

ぐる／＼廻る地球上に
ウヨ／＼動く動物の
その数の半は哺乳類。
數へ上げればヒヒゴリラ
猩々等は人に似て
類人猿と稱へられ
キャツキャと叫ぶ猿類と
一所に合せて靈長類。
聞くのも恐きライオンや
虎狼や灼ひぐま
北海産の白熊や
うらの可愛い、小猫まで
他の獸類を食ふ故に
食肉類の名を得たり。
晝間は屋根の蔭に居て
黄昏時に飛び廻る

うすいみ色のこもりや
小笠原産の大かうもりは
前肢長じて翼の様
故に翼肢類と云ふ。
田地や畠を据りまわし
小虫類を捕え食ふ
眼は大方用なさず
お日様は禁物の
おかしなモグラは食虫類
まだ妙なのは契齒類
此の類すべて憶病者
齒がズン／＼このぶ故に
大事な膳碗タンスまで
かちつて廻る惡ネズミ
リスやウサギやモルモット
此等はすべて此の種なり。
アフリカ、亞細亞の產物で
大きなクセに忠實で
人の手傳ひ小守まで
細目でセツセとする象は
鼻が名物長鼻類。